The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

印度學佛教學研究第六十二巻第二号　平成二十六年三月

Laṅkāvatāra-sūtra（『楞伽経』）の二種如来蔵説
――敦煌写本 P.3751 と日本唯識文献中の佚文を中心として――

李　子　捷

周知のように、「空如来蔵・不空如来蔵」という二種如来蔵説は『勝鬘経』特有の思想とされており、『楞伽経』は如来蔵と阿頼耶識との融合を主張する経典と見なされている。(1)『楞伽』の現存する諸テキストには二種如来蔵説は見られない。しかし、東アジア唯識の諸文献を精査すると、『楞伽』にも二種如来蔵説があるという主張が見える。

日本の法相宗の学僧である真興（九三五―一〇〇四）が『楞伽』の如来蔵説について次のようにまとめている。

問、『楞伽経』亦説二種如来蔵、与『勝鬘経』同歟異歟？　答、名同義異、故彼『経』曰、阿梨耶識名空如来蔵、具足熏習無漏法故名不空如来蔵云云。意曰、有漏第八識名空如来蔵、法爾無漏種子名不空如来蔵為言、義准上可察之。(2)

真興の解釈によると、有漏の阿頼耶識を空如来蔵、法爾無漏種子を不空如来蔵としていることが分かる。即ち、如来蔵排除という意識を持つとされてきた唯識学派または法相宗は、六経十一論の一つとしての『楞伽』の如来蔵説を会通しようとして、『楞伽』の阿頼耶識如来蔵説を空如来蔵と見なし、法相唯識学派の根本説である法爾無漏種子を真実の不空如来蔵としたのである。注意すべきは、ここで挙げられている『楞伽』の原文は「具足熏習無漏法故名不空如来蔵」となっているのに対し、真興自身は「法爾無漏種子名不空如来蔵」と述べていることであろう。いうまでもなく、これは法相宗の「本有無漏種子」理論に従った解釈である。

真興のこの解釈に対する説明として、以下のような基辨（一七二二―一七九二）の再解釈がある。

真興法師釈『楞伽経』説具足熏習無漏法故名不空如来蔵、云法爾無漏種子名不空如来蔵。由此等釈、論中云本来能生種、是本熏無漏種、即不空如来蔵、所言本来自性清浄涅槃。(3)

即ち、本有無漏種子は不空如来蔵にほかならず、本来自性清浄涅槃でもあると説くのである。これは、上文の分析とほぼ一致している。

日本の法相宗だけでなく、中国唐代の唯識学派も似たよう

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

な解釈を示したことがある。基（六三二―六八二）は『楞伽』の如来蔵説については、

十巻『楞伽』第八巻初説、阿梨耶識名空如来蔵、具足無漏熏習法故、名不空如来蔵。彼『経』意説、阿頼耶識能含浄種、名之為蔵、為当仏因名如来蔵。(4)

と述べている。真興の解釈と違い、基はその原文が十巻『楞伽』の第八巻にあると明言している。

慧沼（六四八―七一四）は更に『楞伽』の二種如来蔵説と『勝鬘』との関係について、以下のように説明している。

『勝鬘経』説有二種如来蔵空智、空如来蔵、若離若脱若異一切煩悩蔵、同『楞伽』空如来蔵。世尊、不空如来蔵過恒沙不離不脱不異不思議仏法、即『楞伽経』云、如来蔵識不生不滅、及具足熏習無漏法故、名不空如来蔵。(5)

即ち、『勝鬘』の空智空如来蔵は『楞伽』の空如来蔵と同じであり、『勝鬘』の不空如来蔵は『楞伽』の不空如来蔵に等しいというのである。

それ以外に、筆者が気づいたのは、唐代唯識学派の著作である可能性が高い敦煌写本P.3751である。この写本には『楞伽経』、『瑜伽師地論』、『涅槃経』、『成唯識論』、『肇論』などが引用されている。その内容から見ると、唐代唯識学派の著作と思われる。「故云仏性有二、一理性、二行性。即是有為無漏菩提種子。此行性不似理性遍一切衆生」といい、唐代唯識学派の完備した理行二仏性説のような五姓各別思想が明らかに見える。(6) このP.3751では、

二種種性者、『楞伽』、『勝鬘』意名不同。『楞伽』云、大恵、有二種如来蔵、謂空如来蔵、不空如来蔵。阿頼耶識名空如来蔵、具足熏習無漏法故云不空如来蔵。『勝鬘』亦説二種如来蔵空智、一空如来蔵智、謂縁若離若脱若断若異煩悩蔵智。二不空如来蔵智、謂縁遍於恒沙不離不脱不断不異不思議仏性智。…中略…『勝鬘』依無為義、煩悩是能覆蔵、真理為所覆蔵。『楞伽』依有為義、阿頼耶識為能摂蔵、種子名所摂蔵。蔵種能蔵二種所蔵、皆名如来蔵也。(7)

と説き、『勝鬘経』だけでなく『楞伽』の原文にも二種如来蔵説があると明言している。即ち、阿頼耶識は空如来蔵であり、具足熏習無漏法は不空如来蔵だと説くのである。さらに、『楞伽』が有為義により能蔵としての阿頼耶識を煩悩の空如来蔵と無漏種子の不空如来蔵とすると、解釈している。これより見ると、前に述べた基、慧沼と真興の意見とほぼ同じように、煩悩のある阿頼耶識は空如来蔵とされ、具足熏習の無漏種子は不空如来蔵とされている。これも中国の唯識学派及び日本の法相宗の『楞伽』二種如来蔵説の一例と言えよう。この点から見ると、唐代の唯識学派および日本の法相宗の如来蔵思想の解釈を再検討する必要があると思われる。(8)

では、唯識学派のこの独特の解釈は何を根拠としているのか。それは菩提流支（?―五二七?）訳の十巻『入楞伽経』

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

に基づいていると思われる。『入楞伽経』では、

大慧！　言刹尼迦者、名之為空、阿梨耶識名如来蔵、無共意転識熏習、故名為空。具足無漏熏習法故、名為不空。[9]

と述べている。全体から見れば確かに似ているが、『入楞伽経』には「空如来蔵・不空如来蔵」という表現はやはり見えない。ちなみに、現存の唯一の梵語テキストである*Laṅkāvatāra-sūtra*には「śūnyatā」（空）と「aśūnyatā」（不空）という表現が見られるが、以上に挙げられている菩提流支のこの解釈に対応するサンスクリット原文は見えない。ほかの『楞伽』漢訳本にも見えないので、恐らく菩提流支の解釈であろう。

実際、菩提流支訳の『金剛仙論』にも似たような言い方が見える。即ち、

空善心者、明古今一定法身如来蔵体空、無二十五有生死万相、故言空也。不空善心者、明法身自性体備万徳妙有湛然不空也。故即上『経』言空如来蔵也、前二子句、明法身妙有即不空如来蔵、此一句、明法身妙無即空如来蔵也。[10]

と。ここでは二種如来蔵説が言及されているが、唯識学の心識説との関係は説かれていない。しかし、もし以上に述べた『入楞伽経』の関連部分と合わせて考えると、唯識学派の『楞伽』二種如来蔵説の根拠は菩提流支の唯識思想ではないかと思われる。[11] 異なる点は具足無漏熏習の不空如来蔵と無漏種子の不空如来蔵との区別であろう。

*Laṅkāvatāra-sūtra*の「刹那品」によると、如来蔵は汚染状態にも清浄状態にも通じるのに対し、阿頼耶識は汚染状態のみであることが分かる。「阿梨耶識者名如来蔵」という表現の上に、流支訳は「如来蔵識不在阿梨耶識中」を加入している。これは染汚状態の阿頼耶識に属しない如来蔵もあることを意味すると思われる。この如来蔵が不空如来蔵ではないかと思われる。[12] これより見ると、唯識学派の二種如来蔵説が『楞伽経』に基づくのは間違いがないであろう。

また、『楞伽経』の如来蔵説について、新羅の遁倫（?―?）は、

景師云、阿『楞伽』云阿陀那識是如来蔵者、拠頼耶識有一煩悩種故、能蔵彼如来法身、名如来蔵。又頼耶中有彼如来無染種子、能蔵多果、名如来蔵。[13]

と述べ、摂論学派の慧景の意見を引用している。これより見ると、慧景は、染汚の阿頼耶識としての阿陀那識は一種の如来蔵であり、無染の阿頼耶識はもう一種の如来蔵であると考えていることが分かる。勿論、ここでは「空・不空」という表現は出てこないが、『楞伽』の二種如来蔵説は既に見える。これを唐代唯識学派と摂論学派とのつがなりと見なすことができるであろう。

1　勝又俊教『佛教における心識説の研究』、山喜房仏書林　一九八八

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

年、六〇〇頁。高崎直道『如来蔵思想の形成』、春秋社 一九七五年、一一四、七五六頁。

2 真興撰『唯識義私記』、『大正蔵』七一・三五一上。

3 基辨撰『大乗一切法相玄論』、『大正蔵』七一・一六三上。

4 基撰『大乗法苑義林章』、『大正蔵』四五・三六五下―三六六上。

5 慧沼撰『能顕中辺慧日論』、『大正蔵』四五・四三九下。

6 「理性・行性」については、吉村誠「唯識学派の理行二仏性説について――その由来を中心に」（『東洋の思想と宗教』第一九号、二〇〇二年、二一―四七頁）、岡本一平「清浄法界と如来蔵――理性・行性の思想背景」（『駒澤大学仏教学部論集』第三七号、二〇〇六年）、多田修「基における仏性・如来蔵解釈」（『印度学仏教学研究』第五二巻第二号、二〇〇四年）など参照。

7 フランス国立図書館所蔵のペリオ敦煌写本文献 P.3751 を参照されたい。筆者の理解によって句読点を施す。

8 以上に述べた『楞伽経』の解釈以外、『仏地経論』や『摂大乗論釈』のような玄奘訳の諸経論にも「如来蔵」という表現が明らかに見える。

9 菩提流支訳『入楞伽経』、『大正蔵』一六・五五九下。

10 菩提流支訳『金剛仙論』、『大正蔵』二五・八五九上中。

11 菩提流支の唯識説に関して大竹晋氏などによって一連の先行研究がなされてきたが、筆者はごく最近公開されたばかりの杏雨書屋所蔵敦煌写本文献の中に、「羽 726R」という番号の菩提流支訳『入楞伽経』の注釈書があることに気が付いた。中には「如『経』、為遠離心者是阿梨耶識意意識者、此明為小乗説人無我。法遠離心者是阿梨耶識、意是第二意識、意識者是五識。二乗人但離六識、未離第七阿梨耶識、通語故言離心意識。」などと書いてある。この写本は恐らく現存最古の『入楞伽経』注釈書と思われる。これに対する翻刻及び研究を既に完成させた。『南都仏教』第九八号（二〇一四年）に掲載される予定である。

12 aparāvṛtte ca tathāgatagarbhaśabdasaṃśabdite ālayavijñāne nāsti saptānāṃ pravṛttivijñānānāṃ nirodhaḥ /
筆者訳：如来蔵と呼ばれるアーラヤ識が転依しなければ、七つの転識の滅はない。
菩提流支訳『入楞伽経』：以不知転滅虚妄相故。大慧！ 如来蔵識不在阿梨耶識中、是故七種識有生有滅、如来蔵識不生不滅。

13 遁倫集撰『瑜伽論記』、『大正蔵』四二・五九二下。

〈キーワード〉『楞伽経』、空如来蔵、不空如来蔵、阿頼耶識、無漏種子、菩提流支

（龍谷大学大学院）

NII-Electronic Library Service